九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ミシガン大学研修記(1997-1998)

中里見, 敬
東北大学文学部 : 助教授

https://hdl.handle.net/2324/17118

出版情報：1998-06. 東北大学文学部中国文学研究室
バージョン：
権利関係：

Last modified 4/9/1998

ミシガン大学のアジア図書館

1998年4月9日

研究室で出している雑誌を寄贈するために、ミシガン大学アジア図書館へ行く。ボスの Prof. Rolston が、わざわざアジア図書館の万惟英館長にアポイントメントを取ってくれ、同行してくれる。

寄贈の話は、担当のディヴィジョンに渡すから、ということになり、本の話をいろいろする。万館長の学識は、狭い専門分野に閉じこもりがちな一般の研究者とは違って、とてもスケールが大きく、まるで知らない分野はないかのようだ。

Prof. Rolston とは、共通の趣味である京劇のことを話し、それが発展してかつて東京で歌舞伎をよく見たことに及ぶ。僕が民国の国語運動の資料を集めているというと、劉復がパリで中国語の声調の実験をしたことに触れ、また文字改革の文献はかなり力を入れて集めたからだいたいそろっているはずだ、とのこと。そして、韓国やベトナムの漢字資料の話へと進む。

ミシガン大学のアジア図書館は、アメリカでは議会図書館、ハーバード大学図書館に次ぐ規模であるらしい。1880年代に始まったが、万館長が就任した1960年代から本格的な収集が行われるようになった。中国書と日本書が二大柱で、蔵書60万冊、マイクロフィルムが6万巻とのこと。

ミシガン大学工学部の図書館は Media Union といって、電脳化が進み、そのうち紙の書物はなくなるのではないかと思わせるような、サイバー・スペース化された建物だ。しかし万館長は、工学部と医学部の図書館はそれでよいが、人文・社会科学では将来とも書籍の形態が残るだろうという。原始資料や工具書の重要性を説き、またデジタル・テキストの校勘の問題も指摘する。

アジア図書館だけで年間60万ドル(約8000万円)も、書籍購入のための予算があるのだから驚きだ。万館長によれば、この予算でまあまあやっていけるが、今後高額な CD-Rom が多く出版されるようになると、本の購入にしわよせがいくかもしれないと危惧していた。朝日新聞や日本経済新聞の CD-Rom は、数万ドルしても買う必要があると言っていた。

日本の大学図書館の事情にも精通していて、図書館自体に図書収集の機能がないのは、ドイツのゼミナール形式を受け継いで、各研究室に予算が分配されているからだよと、歴史的背景を教えてくれる。イギリスの大学もそれに近く、昔はアメリカでもそうだったという。一方、中国の大学図書館は梁啓超の作ったプランが基礎になっており、日本とは発想が異なるという。現在のような強力な図書館と優秀なライブラリアンは、アメリカでもやはり機構改革の結果であり、日本の大学も見習うべき点が多々あるように思う。

ライブラリアンの陳さんが作ったウエッブ・サイトは、ここを出発点として、中国・日本の主な情報源にたどり着くことができ、とても便利だ。書籍の重要性を主張する万館長のもとでも、これくらいの対応はしているのである。
[http://141.211.29.21/frame1.htm]

〔ミシガン大学研修記へ戻る〕